

野に吹く花とのかたらいの中で、
古人はふとした事から可憐な花にめぐり逢う。そして、その花の風情におやっノという驚きを覚え、岩千鳥トキ草、鷺草それに時鳥など、ゆかしき姿に鳥の名をつけたりした。
今、愛らしく咲くその花々にふれ

鷺草と時鳥

野に吹く花とのかたらいの中で、
古人はふとした事から可憐な花にめぐり逢う。そして、その花の風情におやっノという驚きを覚え、岩千鳥トキ草、鷺草それに時鳥など、ゆかしき姿に鳥の名をつけたりした。

風情をその姿から感じ、楽しくなる事がある。

☆ ☆ ☆

今、愛らしく咲くその花々にふれ
と、時として古人が名付けたその

鷺草は日当りの良い湧水性の湿原に自生する蘭科植物で、そそとした風情は優美で純潔な白鷺の羽ばたきに似ている。

十数本の苗の中から、一輪か二輪早咲きの花が開く頃のおもむきは、

青田に舞い降りる白鷺が思いだされまた、八分咲きともなると青田のあちらこちらで小魚を漁っていた白鷺が物音に驚き、一齋に舞い上がるさまが思いだされる。

☆ ☆ ☆

昭和の初め、東横線と田園都市線の開通により、荏原郡玉川村大字奥沢地区（現在の世田谷区九品仏）は耕地整理のため、急激に都市化が進み田畑は次々に埋められていった。

この奥沢はかつての奥沢城の跡で南から北へ半島状の台地が早苗のなびく青田へつき出していた。城址の



(ほととぎす)

まわりには泉が湧き出し、あたりの青田には夏ともなると、真白な鷺草が咲きほこっていたという。そしてここには鷺草にまつわる伝説が年寄から孫へと伝えられている。

☆ ☆ ☆

時は室町時代、世田谷城主・吉良頼康は十二人の側室をもっていた。

ある日、家臣奥沢城主・大平出羽守の娘、常盤は宮仕えの縁から頼康の側室にむかえられた。才色兼備の常盤は頼康の寵愛を一身に受け、なに不自由ない幸せな日々を送っていたが、それは長くは続かなかった。十二人の側室は嫉妬し、頼康に仕えていた小姓と不義密通をはかったと告げられ、遠ざけられた。常盤は悲しみに、死を決意。幼い頃から愛育し

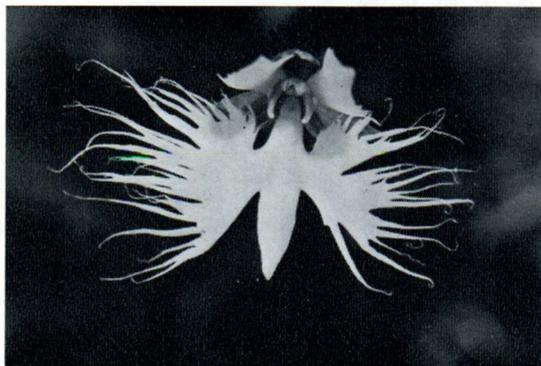
た白鷺の脚に遺書を結びつけ、両親の住む奥沢城へと放った。たまたま、奥沢城付近で狩りをしていた頼康が白鷺を射落したところ脚には手紙が結びつけてあり、開いてみると、それは常盤の遺書。頼康は遺書から常盤の潔白を知り、急遽

帰城したが、時すでに遅く哀れ、常盤はこと切れていた。そして、不思議なことに白鷺の射落されたあたりからは一本の草が生え、白鷺に似た花を咲かせるようになったという。悲しくも、せつないこの話は今や自生する所すらなくなった、この花にはふさわしく、心ひかれるものがある。

☆ ☆ ☆

あちこちに千社礼の貼られた禅寺の山門をくぐり、杉の木立に囲まれた境内に入ると、あたりの静寂の中で草むらの虫の音が寂しく響き、吹く風に初秋の忍び寄りを感ずる。ひと雨来るのでは、と思っていた曇り空が明るくなってきた武蔵野の野火趾は時おり雲が切れ、初秋の柔

(14頁下段へ)



(ゆかしい姿の鷺草)